



えどまえ うみ まな わ
江戸前の海 学びの環づくり
瓦版 第7号



江戸前ESD協議会 〒108-8477 東京都港区港南4-5-7 東京海洋大学海洋科学部

江戸前ESDが生み出した大学と地域との協働企画

— 孵化した二つの大森プログラム? —

池田 玲子 (東京海洋大学・海洋科学部・海洋政策文化学科・教授)

江戸前ESD(「江戸前の海 学びの環づくり」)が動き出して今年でもう3年目に入りました。振りかえってみると、最初の会合では参加した誰もが互いに大きな戸惑いを隠せなかった様子が思い出せます。あの場の誰一人として、このプロジェクトのゴールを説明することはできませんでしたし、まして、具体的な提案をもってきた人もいませんでした。「この先、私たちは何をしたらいいのか?」という不安と、「誰もやったことのないことを考えてもいいんだ」という期待とが入り混じった複雑な心境に陥ったことを思い出します。

さて、こんなミステリアスな始まりだった江戸前ESDプロジェクトは、3年後の今現在、はたしてあの混沌から抜け出せたのでしょうか。今、どこへ向かって進みつつあるのでしょうか。

今回の瓦版第7号は、本プロジェクト一連の江戸前ESD 大学と地域の協働企画の一つであり、2007年6月のワークショップから継続して検討してきた「ふるはま企画」についてご報告します。この企画は、2007年の数回にわたる江戸前ESDワークショップから考え出された二つの「ふるはまプログラム(瓦版第4号掲載のA案とB案)」をもとにしたものです。このふるはまプログラムは、今後の社会を担っていく大学生を主体として、「大学と地域との協働」の企画として2008年に実施されました。この事実こそ、まさに江戸前ESDプロジェクトの確かな成長の姿ではないでしょうか。数回にわたるワークショップからこの企画の実施プロセスに関わってきた私の目には、これまでプロジェクトに参加した多くの皆さんが、丁寧に温めてきた卵のうちの二つが見事に孵化した瞬間を見たように感じました。

今回のご報告は、これまで江戸前ESDが実施してきたいくつかの活動にご参加くださった皆さんと共に、江戸前ESDが成長しつつある事実を喜びたいという思いと、大森プロジェクトにご協力ご支援くださった多くの方々への感謝の気持ちをこめてのご報告となればと思います。また、この瓦版を初めて手にされるの方々には、これをきっかけに、私たちの江戸前ESD活動に少しでも関心をもってください、私たちと一緒に今後の活動に加わっていただきたいという願いをこめてのご報告でもあります。

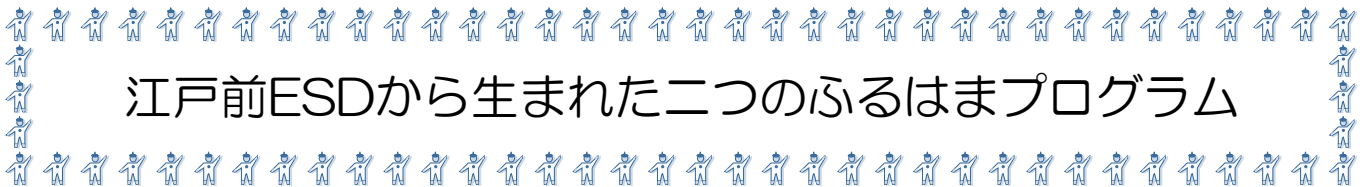
江戸前の海をめぐる人々が生きていく町が、持続的な発展をしていくとはどういうことなのか? 持続的な発展のために、今私たちは何を考え行動しなければならないのか? この二つのプログラムの実現からは、何がその手がかりとして見えてきたのでしょうか。

本号では、大森の街を舞台とするA案「ふるはま生き物探検隊」とB案「海苔の街を伝えていこう」という二つのプログラム構想がどのように実現されたのかを、「大森 海苔のふるさと館」(以下、ふるさと館)のスタッフの小山さんと東京海洋大学の学生たちに報告してもらいます。小山さんについては、すでに瓦版第3号にてご紹介しました。小山さんは本プロジェクトの立ち上げ当初にはNPOメンバーとして、地域の環境教育に携わっておられた方です。昨年からは大森海苔のふるさと館のスタッフともなられ、今回のプログラム実現においては、大田区立郷土博物館学芸員の藤塚さん(瓦版第2号、第3号にてご紹介しました)と共に大森地域と大学をつなぐ上での重要な橋渡しの役割を担っていただきました。

池田 玲子 (いけだ れいこ) 鳥取県境港市出身。高校卒業までは、日本海を眺め、魚を食べ、泳ぎ、潜り、船で友達の家へ遊びに行くという日常生活でした。東京での生活が始まってからというもの、海とは縁がなくなったかのように、都会の人の波に紛れ、ビルに落ちる生活が続きました。ところが不思議なことに、縁あって東京の海が眺められる大学で仕事をする事になり、さらに江戸前ESDへの活動参加によって、海と人とビルと魚・・・全部が私の中でつながりつつあります。



ESDは持続的発展のための教育 (Education for Sustainable Development) の略です。

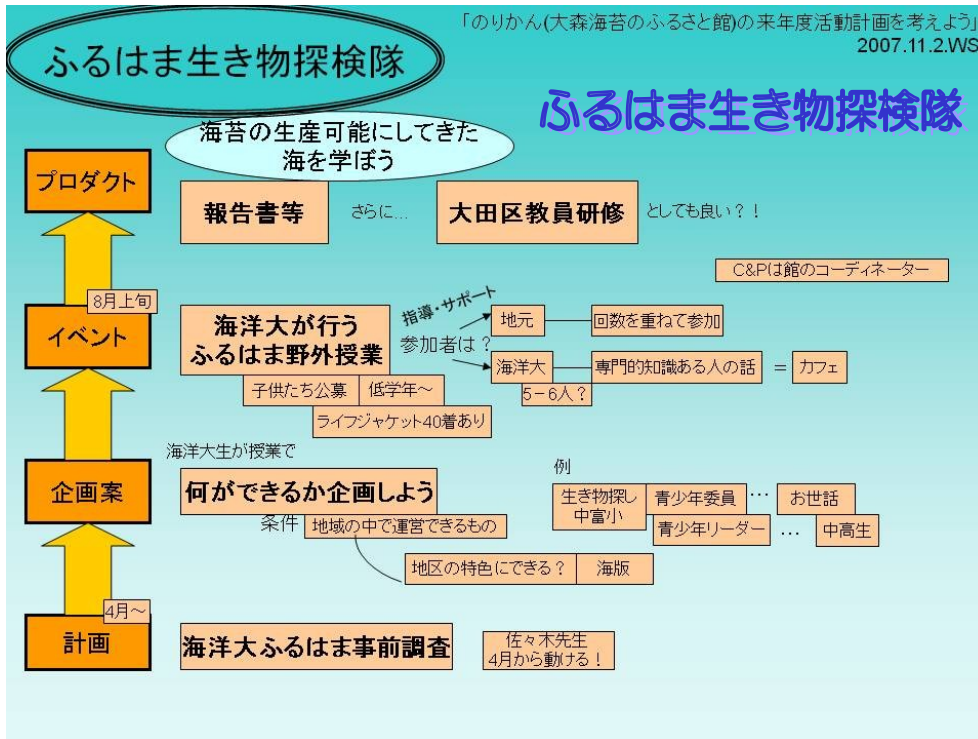


江戸前ESDから生まれた二つのふるはまプログラム

まず、海苔の町 大森(東京都大田区)と、大森の埋立地につくられた人工海浜「ふるさとの浜辺」(通称:ふるはま)を舞台とした二つのプログラムをごく簡単に説明します。これらのプログラムについては瓦版第4号にも説明がありますので、どうぞそちらもあわせてご覧になってください。

なお、本号に記載されている学生たちの所属は、プログラムを実施した2008年度のものです。

池田 玲子 (東京海洋大学・海洋科学部・海洋政策文化学科・教授)



プログラムA 「ふるはま生き物探検隊」

このプログラムは、2008年4月に開園された「大森 ふるさとの浜辺公園」(ふるはま)において、小・中学生を対象に身近な海の環境・生物のことを知らせ、日常生活の視点から環境問題を考える意識をもつ機会を提供することを目的とした学習会プログラムです。

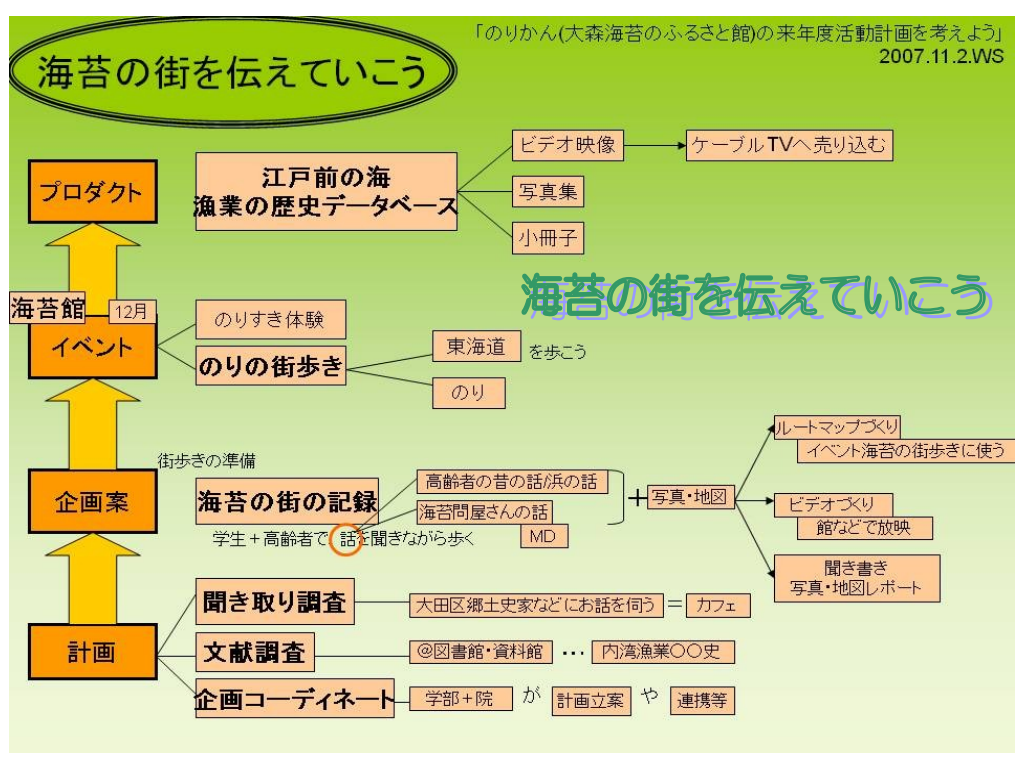
2007年の実施については、瓦版第4号で小林麻理さん(当時4年生)が報告しています。

プログラムB 「海苔の街を伝えていこう」

2008年11月22日、海洋大生と「大森 海苔のふるさと館」(ふるさと館)のスタッフとが海苔の街・大森の「まち歩き」イベントを企画し実施しました。

ふるさと館からの地域への呼びかけに応じて応募してくださった参加者は15名でした。

企画者と参加者がともに、かつて海苔漁業のまちとして栄えた大森の歴史を、日常生活の視点から探ろうとするものでした。



大森 海苔のふるさと館

～江戸前ESDから生まれた「共創」の施設づくり～

小山 文大（NPO法人 海苔のふるさと会 事務局長）

江戸時代の享保(1716～36年)のころに品川から大森にかけて始まったとされる海苔の養殖。その歴史と記憶を後世に伝える施設として、2008年4月6日に「大森 海苔のふるさと館」(以後、ふるさと館)がオープンしました。東京都大田区の施設で、管理運営は地元大森の元海苔生産者を中心として設立されたNPO法人の海苔のふるさと会が受託しています。場所は京浜急行線平和島駅から徒歩で約10分、人工海浜のある大森ふるさとの浜辺公園に隣接し、広々とした気持ちのいいところです。オープンするまでは、海苔という一つのテーマに特化した施設のため、どれだけの人に利用してもらえるか正直心配なところもありましたが、マスコミによる紹介や隣接の公園との相乗効果もあり、多数の来館者を迎えています。

ふるさと館では通常の展示、学校・団体の見学受入れに加えて、毎月1回以上の催し物を行っています。2008年6月と8月に実施した「ふるはま生き物探検隊」と10月と11月に実施した「海苔の街を伝えていこう」は東京海洋大学でのワークショップから生まれたものです。前者では、ふるさとの浜辺でもよく見かけるボラをとりあげ、生き物の観察の基礎や東京湾についての学びを提供しました。後者では、元海苔生産者の話を

聞いたり、大学生という若い人たちの視点を活かしたまち歩きでまちの記憶を伝えていくことに取り組みました。

ふるさと館ができる1年前からどんな活動ができるかをワークショップで話し合ったことから実際に館の催し物として実施するまでの過程を振り返ると、「共創」という言葉がふさわしいと思います。それぞれ立場も経験も知識も異なる大学の先生、大学生、館職員がお互いに持っているものを持ち寄り、新しい形にしていく。誰かが独りで創るのではなく、共に創るという行為。大学生の皆さんと浜で投網を投げたり、一緒に街を歩いたりしながらどんな催し物にしていくかを話し合い、先生のアドバイスももらいながらだんだんと内容を決めていく。実施日までに間に合うだろうかヒヤヒヤしたこともたびたび(?)でしたが、この過程があったからこそ、結果として関わった人それぞれに学びをもたらしたと感じています。

このような江戸前ESDでの経験から生まれた「共創」の考えを持って、今後もふるさと館の運営をおこなっていきたいと考えています。地域の人との共創、これからの社会を担っていく子どもたちとの共創、教育機関や関連施設との共創…。ふるさと館の名前が、海苔の資料館ではなく海苔のふるさと館である意味は、この施設にかかわった人たちに、ふるさと館やその周辺地域がふるさとだと感じてもらえるかどうかにかかっており、その鍵が「共創」だと思っています。

(こやま・ふみひろ)



実習のリハーサル：ふるさと館正面入り口からスター

ふるさと館の展示準備をする
小山文大さん

ふるはま生き物探検隊

大森ふるさとの浜辺公園における ボラを活用した水圏環境教育の有効性

北見 達哉（東京海洋大学・海洋政策文化学科4年）

1. はじめに：「ふるはま」を活用した 学習プログラムの基本概念と実践

私は卒業研究として、子どもたちを対象とする体験型地域型の水圏環境教育のプログラムを考案し、その有効性を検証することになりました。

この研究は、江戸前の海に生活する人々が身近な水圏環境とそこに棲む生物のことを学ぶことによって、自分たちの身の回りの環境に対する意識の向上につながるという考えに基づきました。東京海洋大学4年生が2007年度に行った大森ふるさとの浜辺公園(ふるはま)における魚類調査をさらに進めることを目指しました。地域に密着した水圏環境教育の学習プログラムの開発と実践、並びにその効果について検証することを目的としました。

2. 何を教材とするか

子どもたちにとって、海の生物といえば言うまでもなく「魚」をイメージするでしょう。この「ふるはま」で圧倒的に個体数が多い魚類はボラです。ボラは春から秋にかけて安定して採集できるので、ふるはまを舞台とする学習プログラムの教材として最適な魚だと考えました。また、ボラは生活排水、工場排水に由来するデトリタスや付着藻類をおもな餌として

いるといわれています。つまり、ボラの生態は人間の生活と深く関わりがあるということになります。このような理由から、今回のプログラムの教材としてボラを選ぶことにしました。

3. ふるはまプログラムの実際

この学習プログラムの特徴の第一は、室内学習(プログラム1)と体験学習(プログラム2)との二つがあったことです。第二は、大森海苔のふるさと館との協働によって企画・実施したことです。

実施方法は、まず、「生き物探検隊～ボラから見る東京湾」というプログラム考案後に大森海苔のふるさと館から地域へ募集をかけていただきました。そして、応募してきた小学生を対象にプログラムを実施しました。この実施については、事後に参加した子どもたちに書いてもらったアンケートから効果を見ました。全体的には、このプログラムの実施は児童たちに一定の興味関心を促したと言える結果が得られました。

3-1 プログラム1についての効果

プログラム1のアンケート結果からは、ほとんどの児童がテキストで狙いとした部分については、一定の理解を得たことが分かりました。しかし、印象に



写真1 教材作成のために、ふるはまで投網による生物採集をおこなう。



写真2 屋下がりのふるはま



写真3 ふるさと館での室内学習。説明しているのが北見（著者）。



写真4 ふるはまでの小学生を対象とした体験学習

残っている学習については、「ボラ」と答えた児童は1名で、残りの児童はカニやエビをつかまえたことと回答していました。この結果は、プログラム1で使用したテキストブックがボラへの興味を引き出すことに不十分なものだったか、あるいは室内学習よりも浜での体験学習のほうが印象が強い性質があるためではないかと考えられます。

3-2 プログラム2についての効果

体験学習を重視したプログラム2については、ボラの採集や観察など、プログラムが重点をおいたところに児童が強い印象をもったことが分かりました。実際に浜でボラを採集した後にスケッチをする活動を設定していました。こうした詳細な観察へと促したことで、児童がボラへの強い関心を抱く結果につながったと思われます。しかし、東京の海を良くしていくために何をしたらいいかという問いに対しては、プログラムと関連した回答をした児童は1名だけでした。したがって、プログラム2は、児童に対して教材であるボラへの興味を引き出すことはできましたが、プログラムを通して伝えたかった日常生活と地域の水圏環境との関係についての理解は得られていませんでした。

4. おわりに：プログラムの継続性

ふるはまにおいて、地域の水圏環境を学習するプログラムを作成しそれを実施することは、周辺の児童が環境意識を持つきっかけを作るうえで、重要な意味があると思います。

今回、プログラムを実施しその効果を検証したことによって、今後の水圏環境学習のあり方として二つの点

が明確になりました。

第一に、地域の水圏環境を学習するために作成したテキストブックによる学習は、児童に一定の興味と理解をもたらすことが可能だということです。実際に水圏に出られない地域においては非常に有効だと思いました。

第二に、ふるはまのように水圏環境を容易に体験することが可能な場合には、体験学習を組み込んだほうがより効果的だと考えられます。その際、生物の採集だけでなく、後の課題を工夫することで詳しい観察へと進めることができます。このように、野外で体験したものと資料から得た情報が相補的に作用するような学習展開にすれば、より深い理解につながると考えられます。

さらに言えば、プログラムの内容を忘れさせないために、もう一度復習の機会をつくることで関心を持続させることができ、さらに他の学習への応用へとつながる可能性もあると思います。そのためには、今回のような単発的なプログラムとして実施するよりも、体系性を持たせた地域密着型の環境教育プログラムとしていくことが期待されます。このようなプログラムの実施においては、今回のように地域の学習施設の協力やさらには周辺の小学校の協力が必要不可欠となります。

今後はさらに充実した地域型水圏環境プログラムの内容とその実施方法が考案され、それが体系的に継続的に実施されることを期待したいと思います。

(きたみ・たつや)



海苔の街を伝えていこう

「まち歩き」に参加して

島浦 大（東京海洋大学・海洋政策文化学科3年）

1. はじめに

私たちは、東京海洋大学の水圏環境リテラシー教育推進プログラムの中で、水圏環境コミュニケーション学実習の実習生として「大森 海苔のふるさと館」（以下、ふるさと館）と協働で「まち歩き」を企画しました。大田区大森地域は、江戸時代中頃から昭和30年代後半まで海苔づくりが盛んだった町です。現在でも町のあちこちにその名残が残っています。

水圏環境リーダーを目指す私たちにとっては、この実習を通して環境リーダーに必要なコミュニケーション能力を養うことが目的でした。このための課題は、自分たちで地域や人々について調査を行い、私たちの視点から、私たちの言葉で「海苔の街大森」を一般の人に紹介し、企画参加者と一緒にこの町について様々な視点からの再発見をし、この町の今後の持続的な発展について一緒に考える機会を提供する場を創り出すことでした。

もともとこの企画は、江戸前ESDというプロジェクトにおいて、これまで私たちの先輩を含む大学と地域との協働活動の中で、何度もワークショップが重ねられ、考え出されたものです。ですから、私たちはこの実現段階にあって、まち歩きの本番という正においし



大森の街を自分で歩いて調べる。
左から、広瀬、佐藤、上江洲、島浦（著者）

分が受け持つエリアを決めて調査を行ったわけではなく、同じスポットについて、複数の班が調査したこともありました。正直なところ、受け持つインタビューエリアを決めずに調査を始めたことは、非効率的なのではないかと思いました。しかし、この方法は、自分たちでは調べ切れなかったことを他の班が調べることにより、新たな発見があるので、情報をより深く広く知る方法なのだと気づきました。

2. 「まち歩き」に向けての準備と当日

- (1) 調査を行う前に、海苔に対する知識を得るために、次のような準備をしました。ふるさと館の方には、海苔の収穫から出荷までの流れ、それらに使用する様々な道具、イギリスのドリュー女史の海苔に関する研究成果等々、様々な事について教えていただきました。また、元海苔漁業者の方には海苔を干す時に使う「海苔簀」の編み方を実際に教えていただきました。
- (2) 大森地域の調査は、4つの班に分かれて行いました。各班の得た情報を持ち寄り、互いに共有し、これらを検討して最終ルートを決めました。最初は自

- (3) ルート決定の最終段階では、道の途中にあった煙草屋さんの伊藤さんにインタビューすることができました。ところが偶然にも、伊藤さんのご主人はふるさと館に展示してある「ベカ舟」の所有者（元海苔漁業者；すでに他界）だったのです。亡くなったご主人が、かつてそのベカ舟で海苔をとっていたとのことでした。伊藤さんのお話は「ベカ舟」を作った船大工さんの話題になりました。その「ベカ舟」を作られた船大工さんの小島さんはすでに他界されていましたが、その方のお宅は伊藤さんのお宅から少し先にあり、以前私たちがインタビューしたことのあるお宅でした。このようにして、歩くルートのスタート地点を出た途端に、ふるさと館に展示してある「ベカ舟」の伊藤さん、そして船大工さんのお宅（今は息子さんが工場を経営）が繋がってしまいました。伊藤さんと小島さんには当日のまち歩きでも登場していただき、海苔漁業の日常や「ベカ舟」作りについてのお話をしていただきました。お陰でこの企画がとても深いものとなりました。

(4) 準備の中で、特に大切にしたい点は、「学生目から見た大森」を紹介しようとしたことです。参加者の方は大森在住の方が多く、中にはタウン誌を発行されている平林さんや、大森に詳しい地元の方々も参加されていました。例えば、シーカヤックを使って海から見た海苔のまちを紹介するという部分の工夫もしました。

(5) まち歩き当日は、時間がおしてしまいましたが、参加者が始めて知る点も紹介できました。まち歩き後に参加者の方へのアンケートからも、また振り返りのコメントからも私たちの企画にとっても満足いただけたことが分かりました。

(6) この実習で私にとってもっとも困難を感じたのは、事前調査のためのインタビューでした。今回の実習では大森の方々にアポイントメントなしのインタビュー調査を何度か行いました。貴船堀では、たぐさんの船に混じって、無造作にシーカヤックが積まれていたことに疑問をもち、堀で釣りをしていたおじさん達にシーカヤックについてインタビューを試みました。しかし、皆さんは、なぜなのかは分からない、とのことでした。当然のことかもしれませんが、アポイントメントなしで質問するという事は、相手もまた何も準備しないことなんだということに改めて気づかされました。これまでは、質問をすれば必ず相手からの答えが得られましたが、これは実は事前に相手も準備してくださっていたからだったのです。この点は、私にとって大きな気づきでした。また、相手の方に時間を割いていただいているので、限られた時間の中で、最初の切り出し方やお聞きしたいことの時間配分に苦労しました。話しかけるタイミング、説明の表現、手短かに伝える方法等々まさにコミュニケーションの難しさを痛感させられる経験でした。

3. 大田区役所での活動発表

実習が終わって2ヵ月後の1月31日、私たち実習生は50を超えるNPOが参加する場で、今回の活動について紹介することができました。私たちの活動を全く知らない方々に対して、短い時間でこの企画の内容の紹介とこの活動を通して自分たちが感じたことなどを伝えなければなりません。これはとても難しいものでした。私にとっては、面識のない大勢の方々の前で発表するという事は初めての経験だったので、とても緊張しました。でも、発表後に大きな拍手をいただくことができ、とても気持ちよく発表を終えることができました。手ごたえのある発表だったと思いますが、発表を聞く方の中には、海洋大を知らない方もいて、発



2009年1月31日、大田区市民うんどう会で発表する
島浦（著者）（大田区役所にて）

表内容の理解の程度に差が出てしまった点については反省しています。唯一の心残りは、発表の最初に大学名の変更、教育理念など簡単に紹介した上で、今回の企画の発表を聞いていただいた方が良かったのではないかとこの点です。

4. まとめ

この実習では、大勢の方の前で話をする事、自分の考えていることをうまく伝えること、初めて会う人への話しかけ方など多くのことを学ぶことができました。

また、調査を重ねるごとに知識・情報量が増えていき、参加者の方に伝えたいことの量がどんどん増えていくことに自分でも驚きました。今までは、観光地や離島など特別な場所についてのみガイドが必要なのだと思っていました。しかし、今回の授業を通じて、どのような場所・地域でも調査をすればするほど、特有の部分があり、紹介しきれないほどの話題があることが分かりました。今回のような学生目から見た調査結果を紹介し、互いに地域の環境のことを考える機会を作る活動を続けていけば、地元の方々にとっては新たな視点から町の発展や海の環境について、より深く考えてもらえるのではないかと思います。

今回、私はシーカヤックに乗って羽田の方まで行き、実際に海苔生産が行われていた海も見ることができました。このことから、普段通学で何気なく通る大森の町にもいろいろな側面があること、このことを伝えていくという活動を続けていけば、海の持続的な発展のための何か良いヒントが見つかるのではないかと感じました。

(しまうら・だい)

海苔の街を伝えていこう

木枯らしに潮騒流れ羽田道
～大森ふるさとの浜辺公園での実習にて～

糸井 孔帥（東京海洋大学・海洋政策文化学科4年）

1. はじめに

まちの歴史をひもとき、町の現在の性格を見つめ、町を歩く。そのことは、それほど難しいことではないと思っていた。そう感じた理由は3つあった。1つは、今回の実習地である大森東という地域は600m四方ほどのまちなので、散策は難なくできるという自信である。2つ目は、この地域は本学からのアクセスが容易で、しかも、自然あふれる下町が存在しているという点で他の地域との顕著な違いを発見できるに違いないと思った点にある。3つ目は、なんと言っても、資料集めや聞き取り調査などに対する私自身のフットワークに絶対の自信があったことだった。

ところが、以上の3点は脆くも実習当初に崩されてしまった。出鼻をくじかれる形で実習は始まった。それは、私が本実習の概念である「協働」を明確に理解していなかったからだった。いや、正確に言えば理解したつもりになっていて、実は理解していなかった。現地での調査の現実私の予測をはるかに超える難題だった。

2. ふるはまでの活動

私の調査担当は「大森ふるさとの浜辺公園」だった。ここは地域の方の交流の場としてだけでなく、マリンスポーツができる場所でもある。私は、海苔のまちとして日本一の生産量を誇った大森が、現在は人々が海と気軽に接することができる新たな町として生まれ変わった点に注目した。

私が注目した点は、浜辺公園自体が国や都道府県の管轄下のものではなく、大田区の管轄下にあるという

点である。だからこそ、区民にとっては、面倒な手続きをすることなく気軽に利用することができる。また、10月に開催される「OTAふれあいフェスタ」では、都内でありながらマリンスポーツができる場を「ふるはま」に設けた点で貴重な機会を提供していた。私を含め海洋大の実習学生（水圏環境コミュニケーション実習）は、「ふるはま」初のフェスタ参加にあたって、運営のサポートメンバーとしてシーカヤックに乗り込み、初めて地元の海に触れ海から見る景色にはしゃぐ子ども達とともに、海から大森を眺めることができた。

3. 海からみる海苔のまち大森

10月のフェスタ参加以降、私は自分の計画を練り直したくなった。海からの視点をモチーフに、大森の「まち歩き」を見つめ直してはどうかという思いがわいてきたからである。いくら海辺の近くに長く住もうと、地元の人々も知らない昔の大森と今の大森の姿が見えてくるのではないかと考えたからである。そこで、私ともう一人の実習メンバーの広瀬君はシーカヤックに乗り込み、ふるはまを基点に、内川、貴船掘など、水面からの視点で大森の町をカメラに収めることにした。すでに紅葉が彩り始めた水辺は、古くからの水路の優雅さを残していた。しかし、その反面、海に潜む安全上の不備、水路と日常を不自然に隔離しようとする人工的な環境改変の跡も指摘できた。それでも、こうした矛盾を包み込むかのように、大森の海からの景色は私たちの目には静けさと温かさに満ちているように見える。

かつての海苔漁業から切り離された水辺は、今も昔も人々の生活と身近にあったことに気づかされた。それ



10月の「OTAふれあいフェスタ」。多くの大田区を支援する団体が参加し、活気あふれるひとときだった。



調査、と言いながらメンバーでボートに乗ってみた。

は、経済発展のために必要とされ、自ら変わろうとしてきた町の人々が、埋め立て以前の自分たちの町の姿をしっかりと記憶に残そうという思いからなのであろう。隔離されても変わらぬ町への思いが残っているようだった。私は海沿いの町へのタイムスリップを何度も体験した気がした。

4. 羽田道

羽田道は、昭和11年に川崎大師から東海道へ繋がる産業道路が敷設される前に、羽田に住まう人々が、大森やその先の江戸へと行き来する唯一の通路であり、メインロードだった。私は海からの視点だけでなく、この海沿いの道であった羽田道に焦点を置いて人々の今の暮らしを見ていくことが、大森の歴史と今後の発展を考える上で重要な点ではないかと思った。だから、今回のまち歩きにおいて紹介するべきスポットの一つとした。

羽田道の最北は駿河屋通りと呼ばれ、昔の大森の中心地であった。今回のまち歩きコースにはすでに挙げられていたが、その南側を見ることが私の好奇心をくすぐった。

この道の出発地点は、町での聞き取り調査からは、弁天橋という羽田空港付近の大鳥居から始まるのだということを知った。羽田道のモニュメントと地元の方々の記憶を頼りに、私はこれを北上していく形をとった。驚いたことに、昔のメインロードは、現在よくある国道のようにまっすぐではなく、わざと人を迷わせるかのようには蛇行した道だった。しかし、その道のりには、かなりの歴史を感じさせる古いアスファルトと、行き来する人々にぎやかだった昔を想像させるような情緒あふれる風景が続いていた。大森に到着したとき、急に目の前の風景が変化したと思ったら、私のタイムトラベルは終わりを告げていた。

5. おわりに

大田区では、区内で活動する多くの市民活動団体が互いの活動内容について情報交換をする「うんどう会」が、1月末に区役所で開かれる。ここには50を超える団体が参加していた。私たちの「まち歩き企画」に参加してくださったタウン誌編集者の平林さんに声をかけられて、私たち実習生もこの「運動会」に参加することになった。私たちの活動がこうして地域振興の場に貢献できたことを実感できる貴重な機会だった。

海沿いのまち大森での実習が終わると、いつの間にか冬の始まりが近づいていた。3ヶ月近くも通いつめてきた地域ともなると、なんだか第二のふるさとのような郷愁に誘われる。大森がこれからも私たちの「ふるさと」として発展していったほしい。

今回の実習を通して、私は「協働」とは何なのかを新たに学んだのではなく、「協働」は人がみんな昔からもっている考え方であることを確信した。協働することとは目に見える部分だけのことでなく、人が人とつながりながら生きていくときの人間の「思い」の部分が必要だった。町の今の姿は、ある日突然にそうなったのではなく、人と人との長く深い営みの中でできたもの。人が集まれば自然に発生するもの、それが協働だという実感が持てた。その中で、私は、人は人とつながることで自分の存在を機能させることができ、そのときこそ充実した気持ちになれるのだと思った。

(いとい・こうすい)



写真は上から順に、内川の水門、ビルの向こうに富士山が見える、羽田街道の石碑。カヌーに乗りこむ糸井（著者）。

海苔の街を伝えていこう

対面のコミュニケーションの大切さ

藤田 阿佐子（東京海洋大学・海洋政策文化学科4年）

1. まち歩き企画のための調査活動

昨年11月22日(土)午後、「海苔の街を伝えていこう」の「まち歩き」イベントが海苔のふるさと館をスタート地点として秋晴れの空の下で実施されました。

海苔の歴史に大きくその名を残している大森のまちは、40数年前に海苔の養殖が終焉したにも関わらず、まだあちこちに海苔の名残が感じられます。私たちが企画した「まち歩き」は、こうした海苔漁業の名残が残る大森のまちを、参加者と一緒に歩くことで、参加者と私たち学生とが海苔の街に残っている文化を再発見し合い、同時にそこからこの街の将来を考えてみるのが目的でした。

このまち歩きを企画するにあたって、私たちは9月から数回にわたって大森のまちを自分たちの足で歩いて調査してきました。感じた疑問や発見した海苔関連の事物をリスト化する作業をしてきました。こうしたリストの中から注目してほしい場所を選びました。注目のスポットは全部で10ヶ所を超えました。このスポットについては、実習メンバーの中から調査担当者を決め、本番までに聞き取り調査を重ねてきました。

2. 担当スポット：きふね 貴船神社・ごんしょうじ 厳正寺・なるしま 鳴嶋さんのお宅

私の担当スポットは、貴船神社と鳴嶋さんのお宅、そして厳正寺でした。この3ヶ所はごく近所同士で、しかもお互いが知り合いました。

2-1 きふね 貴船神社

私の最初のアプローチは10月9日(木)でした。午後私を含めた6人で大森のまちを散策中に偶然、貴船神社を見つけました。ちょうどおりよく、貴船神社の宮司の萩原さんにお会いすることができ、厚かましくも連絡先を教えてくださいました。私はそれから3回も宮司さんにお話をお聞きすることができました。萩原さんはとても話が上手な方で、あっという間に2時間も経っていてびっくりしました。萩原さんのお話の内容は神社の歴史だけでなく、食の話からあいさつの話まで日常的なこともたくさんお話しくださいました。毎回、インタビューを終えた後にどこか心がほっと満たされた気持ちになっ

ていくのが不思議でした。

2-2 なるしま 鳴嶋さんのお宅

鳴嶋さんのお宅は、私たちにとって調査の最初のあたりからずっと気になるお宅でした。玄関先にキウイフルーツがたわわになっていて、他にも大きな果物らしき木が庭にいくつも見えました。このお宅はどうみても普通の民家だったので、私たちは毎度話題にするもので、調査の理由が見つからず一歩を踏み出せずにおりました。しかし、ふるさと館の小山さんはこうした私たちの様子を察して助け舟を出してくださいました。小山さんの助け舟により、11月11日(火)に私は、ついにキウイフルーツのお宅に伺うことができました。この日は、キウイフルーツのお宅へはあいさつとインタビューの約束を取ればと思っていたのですが、実は、話はそれだけでは終わらなかったのです。偶然にも鳴嶋さんが厳正寺の氏子であったことから厳正寺の住職、北條さんへの面会に同席してくださることになりました。鳴嶋さんはこの町の歴史をととても詳しく語ってくださいました。鳴嶋さんと厳正寺、ここに縁の不思議さを感じました。

2-3 ごんしょうじ 厳正寺

小山さんが引き寄せてくださった縁の最終地点は厳正寺でした。11月18日(火)に鳴嶋さんと待ち合わせて厳正寺に伺いました。厳正寺の住職の北條さんは女性でした。お寺の歴史や雨がやむことを願う珍しい舞の行事について、鳴嶋さんはとても丁寧にお話しくださいました。住職になられてまだ間もない北條さんは、ご



30年前に植えられたという鳴嶋さん宅のキウイ



厳正寺の正面写真



鳴嶋さん(左) と厳正寺住職の北條さん(右)



貴船神社宮司の萩原さん

自身の幼い頃に感じたお寺の様子や併設されている幼稚園のお話もしてくださいました。私もここで初めて自分の今後の将来設計を考えることになってしまいました。

い協力を頂くことによって無事に終了することができました。この約3ヶ月間をともに過ごしてきた「大森のりんジャー」(下欄参照)仲間と、ご協力くださった大森の方々に心より感謝します。

(ふじた・あさこ)

3. 「人見知り」の克服

今回のまち歩きインタビューが始まるまで、私は心の中でこの調査は私にとって人見知り克服課題だとひそかに思っていました。しかし、最初はどうしてもいつものように物怖じしていました。しかし、時間が経つに連れて、いつしか大森を語ってくださった方々と同じように、私の中にも海苔のまちを伝えていきたいという願いが強くなり、そのことによって私の人見知りはいつの間にかどこかへ消えてしまっていました。

貴船神社の宮司、萩原さんの言葉はとても印象的でした。

「あいさつを自分からしてみなさい。あいさつはした人もされた人も嬉しい気持ちになる。」

私たち学生を大森調査に出す際に、担当の池田先生は「まずは自己開示することが大切」と言われました。この調査経験から、自己開示とは初めての方にあいさつをするように自然にできるもの、そして、それがあってこそ相手は心を開いてくださるのだということを知りました。大森のまちでは、こんな人と人との温かいつながりを大切にする精神が海苔の歴史を守りつつ、地道な発展も支えてきたのだろうか。元・海苔生産者の平林義正さんが、インタビューのときに、

「海苔漁業というのは漁師同士が互いに助け合わないとできない仕事だから」、

と言われたことを思い出します。

この聞き取り調査は、多くの方々との出会いと温か



調査に出かける準備をする藤田(著者)

【大森のりんジャー】

藤田(11頁)・有馬(13頁)報告に出てくる「大森のりんジャー」とは、海苔+りんジャーの意。「まち歩き」に参加した学生たちは、互いに連絡をとりあうメールの件名を【大森のりんジャー】としていたそうです。



ところで、あなたのお名前は?

これとは別ですが、「大森 海苔のふるさと館」には、海苔の知識を問うクイズ「のり検定」があります。これは期間限定で、昨年は夏休みに行いました。この正解数が一定に達した人を「大森ノりんジャー」に認定しようという構想(?)があります。

海苔の街を伝えていこう

企画成功の鍵は人との出会い

竹元 悠華（東京海洋大学・海洋政策文化学科3年）

1. 伊藤さんとの出会い

まち歩き本番まであと一ヶ月となった日、私たちは、本番のための最初のリハーサルとして、教室でみんなで検討したコースを実際に歩いてみることになりました。地元の参加者に、私たち海洋大生からはどこでどんな説明を入れたらいいのか、どんな風に話しかけたらいいのかについて仮決定のコースを歩きながら、私たちはいろいろなことを話し合っていました。

海苔のふるさと館を出発して、ふるさと浜辺公園から貴船神社へと向かう途中、私たちはタバコ屋さんのおばあさんに出会いました。「こんにちは」と声をかけ、私たちが、「大森の海苔漁業」について調べていることをお話しすると、おばあさんはとても驚いたような顔で、「あら、そうなの？私は、前にここで海苔を作っていたのよ」と言い、こう続けたのです。「海苔のふるさと館にあるベカ舟は、うちで使っていたものなのよ」と。このタバコ屋のおばあさんが伊藤さんでした。この日私たちは、伊藤さんのお話を聞き終えた後も、「信じられない！」「今日はすごい！」と、この出会いに驚き、そして喜びました。

2. 伊藤さんのお宅での聞き取り調査

後日、伊藤さん宅の調査を任された私は、緊張しながら伊藤さんに電話をかけ、お話を聞かせていただくことをお願いしました。伊藤さんは、あの日の出会いを覚えていてくださり、「私でよければ」、と快諾してくださいました。

インタビュー当日、私は同じ実習生チームの鈴木先輩と一緒に伊藤さん宅を訪れました。インタビューをお願いしたのが前日だったにも関わらず、伊藤さんは私たちのために、わざわざ海苔漁を行っていた当時の写真や、ベカ舟を大田区に寄贈したときの広報を探し出しておいてくださいました。そんな伊藤さんの温かいご協力には私は再び驚かされ、そして感謝の気持ちでいっぱいになりました。

インタビューでは、当時の町の様子、地元ならではの海苔の食べ方などなど、1つ1つの質問に対して、伊藤さんは昔のことを懐かしむ様子で、とても丁寧に答えてくださいました。私たちが用意した質問以外にも、当時の伊藤さんご自身の具体的な生活体験や、伊藤さんの身に起こったさまざまな不思議な出来事など、私たちはたくさんのお話をお聞きすることができました。

3. 人との出会いに感謝するということ

インタビューを終えた後に、私たちは「まち歩き当日に、地域の方々に伊藤さんから直接お話をさせていただけないか」とお願いしてみました。すると、伊藤さんは、「恥ずかしいなあ」と言いつつも快く引き受けてくださいました。

伊藤さんは、私たちとの出会いについて、次のようにおっしゃっていました。「あなた達と出会えたのはただの偶然じゃなくて、きっと何かの縁だと思うのよ。」あの日、私たちがタバコ屋さんの前を通りかかって伊藤さんに声をかけたことを、私はそれまで、「すごい偶然だ！」と思っていたのですが、伊藤さんのこの言葉をきいて、この出会いは実は「縁」あつてのものだったと、ごく自然に納得してしまいました。そして、もしかして、このまち歩きを通して出会った方々ともこの「縁」によるものなのだと思います。

伊藤さんに出会うまで、私は人と人との「縁」についてなど感謝したことはありませんでした。しかし、この伊藤さんとの出会いをはじめ、今回のまち歩き企画を通じて出会った全ての人たちとの「縁」に心から感謝しています。

一緒に企画を考えた先生、実習チームの先輩、同級生、海苔のふるさと館の方々、大森で出会った方々とのすべての「縁」が、このまち歩き企画の成功のカギとなったことは間違いありません。「人との縁の大切さ」を学ぶことができたこのまち歩き企画は、私にとって本当に貴重な経験となりました。

(たけもと・ゆか)



伊藤さん（前列中央）を囲んで。
学生は、前列左に竹元（著者）、右に藤田。
後列左から、有馬、上江洲、佐藤、島浦、広瀬、鈴木。

海苔の街を伝えていこう

今も残る海苔船への熱い思い

有馬 優香（東京海洋大学・海洋政策文化学科3年）

1. 小島さんとの出会い

私たち「大森のりんジャー」(11頁参照)が小島克巳さんと奥さんに出会ったのは、10月25日のまち歩きハール第1回目のことでした。大森海苔のふるさと館からふるはまを抜けて、かつて海苔船がつけられていたという場所までくると、伊藤さんにお会いしました。その日たまたま通りかかった私たちに伊藤さんは海苔漁業をしていた当時のお話を話してくださいました。ふるさと館の正面に展示されている海苔船は伊藤さんが寄贈されたものだったことを聞いて驚きました。話が終わってさらに進むと、先ほど伊藤さんから「あっちの方に船大工さんがいたんだよ」というお話をきいたばかりなのに、すぐにその船大工さんの家の方との偶然の出会いがあり、皆で驚き、非常に嬉しかったのを覚えています。

小島さんは、ちょうど仕事仲間の方々と一緒に外でテーブルを囲んで楽しそうにお話をしておられました。その歓談のひと時を破って突然押しかけた私たちに、当時作られていたベカ舟の模型をわざわざ奥から出してきてくださり、一つ一つ丁寧に説明してくださいました。当時の町の様子を写した貴重な写真についてのお話も聞かせてくださいました。

海苔漁業が行われていた当時、多くの海苔船が停泊していた貴船掘の一番奥に小島さんご一家が造船かりやしていた仮屋が位置しています。仮屋は、和船をつくる造船所のこと、大森の海苔づくりには欠かせない海苔船作りをされていたのが小島さんご一家でした。

2. 小島さんへの聞き取り調査

海苔船には「親船(海苔船)」「中ベカ」「ベカ」と、それぞれ大きさの違う船があります。これは、親船にベカ舟を乗せて海へ出て行き、海苔取り作業をする際には、長さ4.5m、幅0.8m程の大きさの一人乗りのベカ(海苔取り舟)に乗り移っていたのだそうです。この海苔取り舟は、今でいうカヤックの形に似ていて、人が漕ぐときには船尾を前にすると安定して進むことができたそうです。また一つの船をつくるのにも、船の箇所ごとに木材の種類が違って、しかも機能をもった細かな工夫があちこちに施されていました。

当時の人々は、小島さんのお宅で作られていた船は、一目見ただけで小島さんが作った船だとわかるほどラインが美しく、海苔漁業者の方々からもとても評判

がよかったそうです。

現在では、中ベカ舟は実物も写真にも記録が残っていないそうです。このことを残念に思う町の人々の思いを汲んで、大田区郷土資料館の働きかけにより、実際に船大工をされていた小島克巳さんのお父様とそのご兄弟によって、平成8年(1996年)に何十年ぶりで復元されたのだそうです。造船のための道具や仮屋がほとんどそのまま残っていたからこそ、この復元に至ったのだそうです。

実際に小島さんのお宅の周りの様子を見ていると、道の形や建物など、当時の写真と同じ風景がなんとなく面影として残っているので、この歴史を感じるができます。ところが、この小島さんのお宅の船をつくっていた仮屋はもうすぐなくなってしまうそうです。

3. 次なるステップへ

まち歩きの当日、多くの参加者と語り合いながら歩くことができたことはもちろんですが、当日までの準備や聞き取り調査の段階で、この小島さんとの出会い、大森のまちの多くの方との出会いは、私にとってとても貴重なものでした。大森の方々は、人がもつ歴史、その温か



小島さんご夫妻。ベカ舟の模型の前で。



「まち歩き」で、小島さん(右)を紹介する有馬(著者；中央)。手前がベカ舟の模型。

み、そこに住む方々が人とのつながりの中でどのような時間を過ごしてきたのかを私たちに語ることで、感させ、理解させてくださいました。こんな機会は私たち大学生にはなかなか感じる機会はありません。これは、見ず知らずの私達を、大森の方々が快く受け入れてくださったからこそ実現したのだと思います。私たちの企画実施のためにご協力してくださり、私たちのために貴重なお時間を割いて関わってくださった方々

に心より感謝いたします。

私たちは、この不思議で素晴らしい出会いや、苦しくて楽しかった経験を生かして、まずは、私たちの周辺から少しずつ学びの「輪」、人の「輪」を大きくしていきたいよう、次へのステップを踏み出したいと思います。

(ありま・ゆうか)

Yuka² が選んだ 「まち歩き」 場面9選



10月25日、初めて出会った小島さんに、ベカ舟を見せていただいた。右から、小島さん、池田、広瀬。



10月25日、小島さんに、海苔漁業が盛んであった頃の古い写真を見せていただく学生達。



10月25日、小島さんのかりや飯屋。ここで海苔船をつくっていた。



10月25日「海苔の街を伝えていこう」第1回「お話し」の後で、平林義正さん（元・海苔生産者；手前）に詳しく伺う。左から、竹元、有馬、島浦。



11月22日「海苔の街を伝えていこう」第2回「まち歩き」にて、厳正寺で平林さんのお話を聞く参加者たち。



10月9日、貴船神社を初めて訪ね、宮司の萩原さんにお目にかかった。



11月8日、ふるさと館周辺にお花を植えてくださっている田中宏さん（元・海苔生産者）と藤田（右）。



10月25日、ふるさと館に展示してある海苔船を寄贈した伊藤さんと偶然、出会った瞬間。



11月22日まち歩き本番の朝、学生全員で朝日のまぶしいふるはまを歩く。

写真キャプション：有馬優香 & 竹元悠華 (Yuka²)

海苔の街を伝えていこう

まち歩きパンフレットができるまで

上江洲 智史（東京海洋大学・海洋政策文化学科4年）

まち歩きで使っていただくパンフレットを作るにあたって、実習メンバーの意見をもとに私が作業を担当することになりました。このプロセスを簡単に報告します。

1. パンフレットについて意見交換

はじめにメンバー全員に呼びかけ、どんなイメージのパンフレットをつくるかの意見交換の場を設けました。

<ここで出た意見>

2つのパンフレットを作成する必要がある。ひとつは、この企画の趣旨、コース紹介、簡単なスポット紹介などが書いてあり、当日、歩いている間に持って見てもらうための「前パンフレット」、そして、もうひとつは、企画が終わった後に、まち歩き全体を振り返ってもらうため（持ち帰り用として）の「後パンフレット」。

そこで、リーフレットのデザイン（色、サイズ、盛り込む項目）について以下のことが決まりました。

- タイトル「海苔のまちを伝える まち歩き」に決定。
- 当日はお年寄りの方の参加も考えられるため、リーフレットの文字を大きくして見やすいようにする。
- 色はテーマに合わせて青か緑を使用する。
- 地図は簡易なものを（手書きでも）載せる。
- 持ちやすく、開きやすいものをつくる。

2. サンプルの作成

仲間の意見をもとに、サンプルを作成しました。

<気をつけた点>

- 緊張感がなく、軟らかい印象を与えるために、色は薄め、曲線を多めに使用する。
- 企画の目的、意図や調査経緯を伝えるために、実習生と協力者の写真をできるだけ多く配置する。企画メンバーの名前を載せる。
- 実習プログラムに沿った流れが出るようにする。

3. サンプルの検討と改善

できあがったサンプルをメンバーにメールで送り、検討して下のような意見をもらいました。

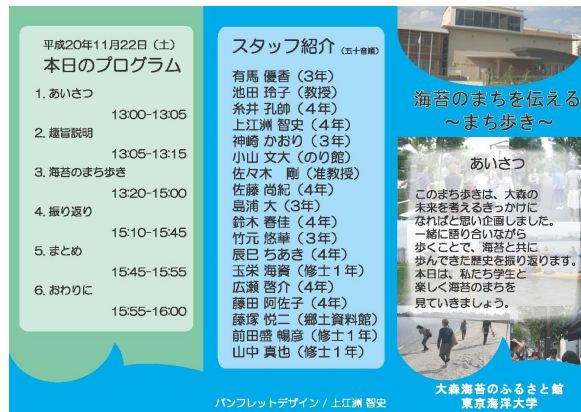
<メンバーから出た意見>

- 表紙の文字は、横書きで統一したほうが見やすい。
- 編集後記も載せる。
- もっとスタッフの名前の文字を大きく。

この後も何度もメンバーからメールや直接、指摘や具体的な修正案をもらいながら、とうとうまち歩き実施当日の早朝まで修正を重ねることになりました。

こうして完成したパンフレットが右の写真です。

（うえず・さとし）



作成したパンフレット。上から順に、まち歩きルートマップ、本日のプログラム、まちの地図。



2009年1月31日大田区役所にて上江洲（著者）

メンバーの声：「みんなで細かい部分についての希望を出しましたが、それを上江洲さんがこだわりながらデザインして完成させてくれました。当日、参加者にもとても好評でした。」



表 2008年度に江戸前ESDがおこなったおもな活動

月 日	活動の内容
2008年 6月22日 @ふるさと館	ふるはま生き物探検隊「ボラから見る東京湾」 東京湾に多く生息するボラを通して湾の生き物と環境について学習した後、ふるはままで生き物を採集・観察。(講師：佐々木剛；北見達哉：本号4-5頁参照)
7月28日 (瓦版第5号参照)	JST平成20年度地域科学技術理解増進活動推進事業地域活動 サイエンス・カフェ「水が汚ってどういう意味？」(7月30日)の準備 ；高浜運河の水質測定法、環境教育指導法を学ぶ。(講師：神田稯太、小山文大氏)。
7月29日	港区教員研修「ワークショップで学ぶ江戸前の海～体験型授業のデザインのために～」 開催。(講師：池田玲子、川辺みどり)
7月30日 (瓦版第5号参照)	JSTサイエンス・カフェ「水が汚ってどういう意味？」 実施。海洋大オープンキャンパスと併催。(講師：神田稯太)
8月22日 (瓦版第6号参照)	JSTサイエンス・カフェ「江戸前の海と魚を知ろう」 を附属図書館と合同で実施。(講師：河野博、工藤貴史、鈴木晴美氏)
8月24日 @ふるさと館	ふるはま生き物探検隊「ボラから見るふるさとの浜辺」 6月に続き、今回は、ボラの成長を通して、ふるはまの自然環境について学ぶ。(講師：佐々木剛；北見達哉：本号4-5頁参照)
10月25日 @ふるさと館	「海苔の街を伝えていこう」第1回「お話し」 ：元・大森海苔生産者の平林義正氏のお話を聞く会を開催。(本号14頁参照)
10月30日	財団日本生命財団 から「地域住民の協働による東京湾沿岸管理モデル構築」研究会(代表：河野博)へ 学際的総合研究助成を授与 。
11月2日	東京海洋大学「 海鷹祭 」にて江戸前ESD展示発表(東京海洋大学)；江戸前佃煮の原料生産・加工の紹介展示および試食会を実施。
11月22日 @ふるさと館	「海苔の街を伝えていこう」第2回「まち歩き」 ：海洋大生が一般公募した方々を対象に大森の町歩きツアーを全て準備、実施した。この成果は、翌年1月31日大田区市民活動うんどう会で発表。(本号6-15頁参照参照)
12月 2日	国際交流基金 平成20年度市民青少年交流(主催)事業「持続可能な社会づくりのためのNGO/NPOグループ招へい企画」 ワークショップ「Sharing ESD Experience」 開催。参加者は海外から15名、本学教員・学生23名。
2009年 3月 8日 @ふるさと館	サイエンス・カフェ「再発見！ふるさと東京の海」 ：「大田区大森西ふるさと祭り」において；神田稯太「東京湾の水質と二酸化炭素収支」；河野博「東京湾湾奥の魚たち」

編集後記

本号では、昨年の夏と秋に行われた「大森 海苔のふるさと館と東京海洋大学との協働企画」二つについて紹介しました。この二つのプログラムは、2年前から始まった江戸前ESDの活動の中で生まれた構想を実現したものです。

学生たちが行なった地域の方々への聞き取り調査は、この企画に参加してくださった日本経済新聞の記者である木村さんが、4月2日の夕刊に記事にして掲載してくださいました。

大学と地域との協働の試みは、すでに日本のあちこちで実現されています。しかし、東京湾をめぐるテーマでの大学・地域の協働企画は世界に一つしかありません。この企画に関わった東京海洋大学の学生たちは、東京海洋大学が新たに設けた「水圏環境教育リーダープログラム」の学内認定を受けた最初の学生となります。今後、彼らには、水圏環境についての知識が日本社会一般の常識となるように、人々と共有し深めていくための活動作りをリードする存在となることが期待されています。(池田)

2008年度江戸前ESDのおもな活動を右表に掲げました。昨年度もいろいろなことをおこないましたが、「カフェ」が多かったように思います。

2008年10月～2010年9月の期間、財団日本生命財団から学際的総合研究助成をいただけることになりました。本号を発行できるのもこの助成のおかげです。

今年度、江戸前ESDで予定している大きな活動は次のようです。

6月20日(土) 葛西海浜公園でNPO法人「葛西臨海・環境教育フォーラム」といっしょに、「葛西臨海たんけん隊」の水上バスを利用した海洋環境教育プログラムを実施します。10月にも同じプログラムを行う予定です。ご興味のある方は、葛西臨海たんけん隊HP (<http://www.cd-inst.co.jp/kasai/>) をご覧ください。

7月26日(日)、8月23日(日)「浜辺の生き物探検隊」と12月6日(日)「まち歩き」を、大森 海苔のふるさと館でおこないます。詳しくは、大森 海苔のふるさと館(電話03-5471-0333)へお問い合わせください。

8月28日(金)には東京海洋大学附属図書館[品川]で江戸前ESDカフェ@Libraryを開きます。今年の企画は、これから学生たちといっしょに考えます。

9月から2月までの第3土曜日(1月は第4土曜日)には、大森 海苔のふるさと館で江戸前マイスター講座(仮称)の開講も計画しています。

他にもいろいろな企画があります。(川辺)



発行 江戸前ESD瓦版編集委員会
〒108-8477 東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学海洋科学部江戸前ESD事務局内
電話/FAX 03-5463-0574 (川辺研究室)
電子メール edomae@kaiyodai.ac.jp